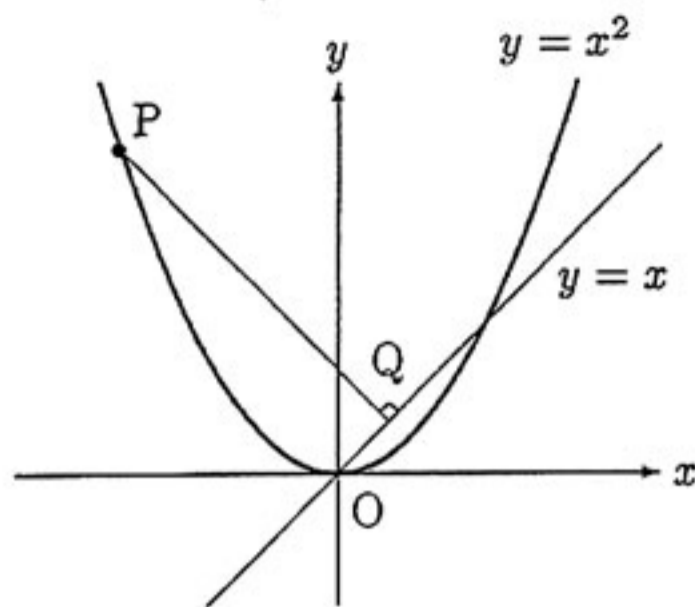


2009年度 千葉大学 前期 数学

$$\boxed{1} \quad \begin{cases} y = x^2 & \dots\dots ① \\ y = x & \dots\dots ② \end{cases}$$



(1) ①, ② 上の点をそれぞれ $P(t, t^2)$, $R(k, k)$ とすると

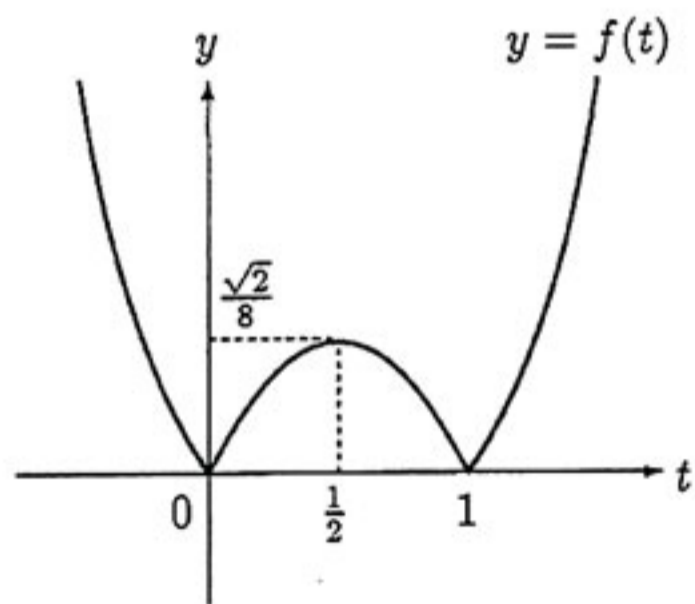
$$\begin{aligned} PR^2 &= (t-k)^2 + (t^2-k)^2 \\ &= 2k^2 - 2(t+t^2)k + t^2 + t^4 \\ &= 2\left(k - \frac{t+t^2}{2}\right)^2 + \frac{t^2(t-1)^2}{2} \end{aligned}$$

は $k = \frac{t+t^2}{2}$ のとき最小値 $\frac{t^2(t-1)^2}{2}$ をとる. よって ② 上の点で P に最も近い点 Q は

$$Q\left(\frac{t+t^2}{2}, \frac{t+t^2}{2}\right) \text{ であり, このときの2点間の距離は } PQ = \sqrt{\frac{t^2(t-1)^2}{2}} = \frac{\sqrt{2}}{2}|t(t-1)|. \\ \frac{\sqrt{2}}{2}|t(t-1)| \dots\dots \text{ (答)}$$

$$\begin{aligned} (2) \quad f(t) &= \frac{\sqrt{2}}{2}|t(t-1)| \\ &= \begin{cases} \frac{\sqrt{2}}{2}t(t-1) &= \frac{\sqrt{2}}{2}\left(t - \frac{1}{2}\right)^2 - \frac{\sqrt{2}}{8} & (t < 0, 1 < t) \\ -\frac{\sqrt{2}}{2}t(t-1) &= -\frac{\sqrt{2}}{2}\left(t - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{\sqrt{2}}{8} & (0 \leq t \leq 1) \end{cases} \end{aligned}$$

よってグラフは右図となる.



(3) (i) $0 \leq t \leq 1$ のとき

$$0 \leq f(t) \leq \frac{\sqrt{2}}{8} \text{ であるから } f(t) = \sqrt{2} \text{ を}$$

みたす t は存在しない.

(ii) $t < 0, 1 < t$ のとき

$$f(t) = \sqrt{2} \iff \frac{\sqrt{2}}{2}t(t-1) = \sqrt{2}$$

$$\iff (t+1)(t-2) = 0$$

$$\iff t = -1, 2$$

これらは $t < 0, 1 < t$ に適する.

$\therefore t = -1, 2 \dots\dots \text{ (答)}$

2 (1) $AB = x$ とすると $\triangle ABC$ に余弦定理を用いて

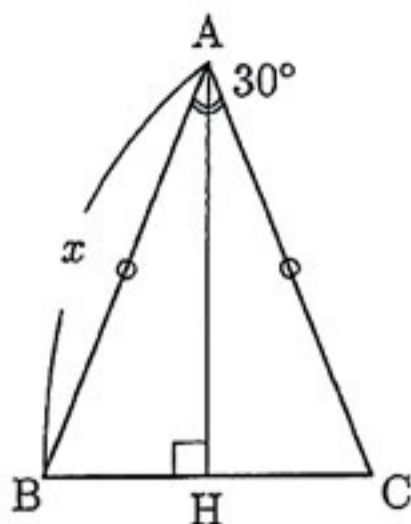
$$\begin{aligned} BC^2 &= AB^2 + AC^2 - 2AB \cdot AC \cos A \\ &= (2 - \sqrt{3})x^2 \end{aligned}$$

三平方の定理より

$$4AH^2 = 4(AB^2 - BH^2) = 4x^2 - BC^2$$

であるから

$$\begin{aligned} \frac{AH^2}{BC^2} &= \frac{4x^2 - BC^2}{4BC^2} \\ &= \frac{1}{2 - \sqrt{3}} - \frac{1}{4} \\ &= \frac{7 + 2\sqrt{12}}{4} = \frac{(\sqrt{4} + \sqrt{3})^2}{4} \quad \therefore \frac{AH}{BC} = \frac{2 + \sqrt{3}}{2} \dots\dots (\text{答}) \end{aligned}$$



$$\begin{aligned} (2) \quad \sin\left(\frac{A}{2}\right) \cos B &= \frac{BH}{x} \times \frac{BH}{x} = \frac{BH^2}{x^2} \\ &= \frac{BC^2}{4x^2} \\ &= \frac{2 - \sqrt{3}}{4} \dots\dots (\text{答}) \end{aligned}$$

【別解】 (1) $B = C = \frac{180^\circ - A}{2} = 75^\circ$ だから

$$\begin{aligned} \frac{AH}{BC} &= \frac{AH}{2BH} \\ &= \frac{1}{2} \tan B \\ &= \frac{1}{2} \tan 75^\circ \\ &= \frac{1}{2} \tan(45^\circ + 30^\circ) \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{\tan 45^\circ + \tan 30^\circ}{1 - \tan 45^\circ \tan 30^\circ} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{\sqrt{3} + 1}{\sqrt{3} - 1} = \frac{2 + \sqrt{3}}{2} \dots\dots (\text{答}) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (2) \quad \sin\left(\frac{A}{2}\right) \cos B &= \sin 15^\circ \cos 75^\circ \\ &= \sin(90^\circ - 75^\circ) \times \cos 75^\circ \\ &= \cos^2 75^\circ \\ &= \frac{1 + \cos 150^\circ}{2} = \frac{2 - \sqrt{3}}{4} \dots\dots (\text{答}) \end{aligned}$$

3

a, b, c, d : 自然数で

$$\begin{cases} c = 4a + 7b \\ d = 3a + 4b \end{cases} \iff \begin{cases} 5a = -4c + 7d \dots\dots ① \\ 5b = 3c - 4d \dots\dots ② \end{cases}$$

を満たしている.

(1)

$$① \times 2 + ② : 5(2a + b) = -5c + 10d$$

$$2a + b = -c + 2d = -(c + 3d) + 5d$$

これより $c + 3d$ が 5 の倍数より, $2a + b$ も 5 の倍数となる.

(2) c と d がどちらも素数 p の倍数より $c = pc'$, $d = pd'$ (c', d' : 自然数) とおける.
これらを ①, ② に代入して

$$\begin{cases} 5a = p(-4c' + 7d') \dots\dots ①' \\ 5b = p(3c' - 4d') \dots\dots ②' \end{cases}$$

いま “ $p \neq 5$ ” とすると p と 5 は互いに素であるから ①', ②' から

a, b は p で割り切れる, すなわち a と b は p を共通素因数にもつ

これは “ a と b が互いに素である” ことに反する. よって $p = 5$

4

1 から 9 のカードの 9 枚の中から 4 枚を取り出すとき、その取り出し方は、

$${}_9C_4 = 126 \text{ 通り}$$

であり、これらは同様に確からしい。

- (1) X が 5 の倍数となるとき、取り出された 4 枚の中に 5 のカードが含まれていればよく、そのような取り出し方は、5 以外の 8 枚のカードから 3 枚を取り出したときの取り出し方と一致するので、

$${}_8C_3 = 56 \text{ 通り}$$

である。よって、 X が 5 の倍数となる確率は、

$$\frac{56}{126} = \frac{4}{9}$$

である。

- (2) X が 10 の倍数となる取り出し方は、5 のカードと偶数のカードが取り出された 4 枚の中にあればよく、これは、 X が 5 の倍数となる取り出し方のうちから、「5 と 3 枚の奇数のカードが取り出される」というものを除いたものである。

5 と 3 枚の奇数のカードが取り出される取り出し方は、5 以外の 1, 3, 7, 9 の 4 枚の奇数のカードから 3 枚を取り出す取り出し方と一致するので、

$${}_4C_3 = 4 \text{ 通り}$$

である。これより、 X が 10 の倍数となる確率は、(1) も考慮して、

$$\frac{56 - 4}{126} = \frac{26}{63}$$

である。

- (3) X が奇数となる取り出し方は、1, 3, 5, 7, 9 の 5 枚の奇数のカードから 4 枚を取り出す取り出し方であるので、

$${}_5C_4 = 5 \text{ 通り}$$

である。「 X が奇数となる」の余事象が「 X が偶数となる」であるので、 X が偶数となる確率は、

$$1 - \frac{5}{126} = \frac{121}{126}$$

である。

X が 6 の倍数となるためには、 X が偶数である必要があり、また、 X が偶数となる取り出し方のうち X が 6 の倍数とならない取り出し方は、

「2, 4, 8... ①のカードから少なくとも 1 枚」かつ「1, 5, 7 のカードから少なくとも 1 枚」

と取り出される取り出し方であり、このような取り出し方は

$$\text{①から 1 枚取り出すのが、} {}_3C_1 \times {}_3C_3 = 3 \text{ 通り}$$

$$\text{①から 2 枚取り出すのが、} {}_3C_2 \times {}_3C_2 = 9 \text{ 通り}$$

$$\text{①から 3 枚取り出すのが、} {}_3C_3 \times {}_3C_1 = 3 \text{ 通り}$$

より、合わせて

$$3 + 9 + 3 = 15 \text{ 通り}$$

となる。

これより求める確率は

$$(X \text{ が偶数となる確率}) - (X \text{ が偶数だが 6 の倍数とならない確率})$$

$$= \frac{121}{126} - \frac{15}{126} = \frac{106}{126} = \frac{53}{63}$$

である。

5

(1) 直線 AB の方程式は $y = -\frac{2}{3}x + 2$ であるから、

$$P\left(t, 2 - \frac{2}{3}t\right) \quad \text{ただし, } 0 \leq t < 3$$

とおける. このとき, $H(t, 0)$, $M\left(\frac{3+t}{2}, 0\right)$ であり (図 1),

$$OP^2 = t^2 + \left(2 - \frac{2}{3}t\right)^2 = \frac{13t^2 - 24t + 36}{9}$$

$$OM^2 = \left(\frac{3+t}{2}\right)^2 = \frac{t^2 + 6t + 9}{4}$$

$$\begin{aligned} OP^2 - OM^2 &= \frac{1}{36} \left\{ 4(13t^2 - 24t + 36) - 9(t^2 + 6t + 9) \right\} \\ &= \frac{1}{36} (43t^2 - 150t + 63) \\ &= \frac{1}{36} (t - 3)(43t - 21) \end{aligned}$$

となるので, $t - 3 < 0$ を考慮して

$$0 \leq t \leq \frac{21}{43} \quad \text{で } OM \leq OP, \quad \frac{21}{43} \leq t < 3 \quad \text{で } OP \leq OM$$

となる.

$\triangle OPM$ を O を中心に回転させてできる円の半径 r とすると, r は線分 PM 上で O から最も離れた点と O との距離である. よって, r は OP , OM のいずれか小さくない方と一致するので, 円の面積 $S = \pi r^2$ は上の結果を用いて次のように分類される (図 2).

(i) $0 \leq t \leq \frac{21}{43}$ のとき, $r = OP$ であり,

$$S = \frac{\pi}{9} (13t^2 - 24t + 36) = f(t)$$

$f(t)$ は, t の 2 次関数でグラフの軸は $t = \frac{12}{13} > \frac{21}{43}$ であるから, $t = \frac{21}{43}$ で最小となる.

(ii) $\frac{21}{43} \leq t < 3$ のとき, $r = OM$ であり,

$$S = \frac{\pi}{4} (t + 3)^2 = g(t)$$

$g(t)$ は, t の 2 次関数でグラフの軸は $t = -3 < \frac{21}{43}$ であるから, $t = \frac{21}{43}$ で最小となる.

(i), (ii) より, $0 \leq t < 3$ において S は $t = \frac{21}{43}$ で最小となる. このときの P の y 座標も求めて

$$P\left(\frac{21}{43}, \frac{72}{43}\right)$$

..... (答)

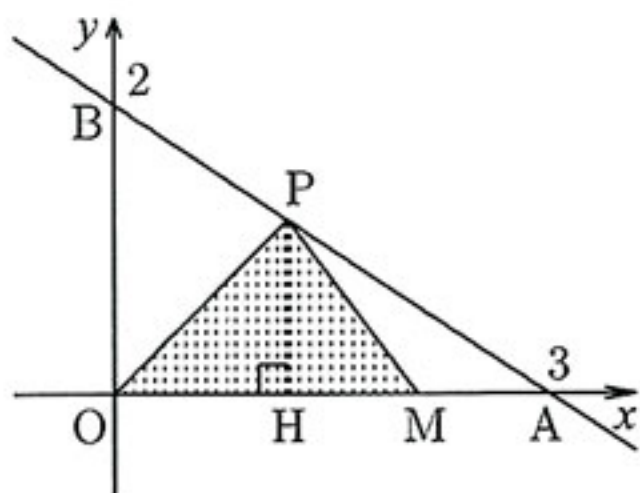


図 1

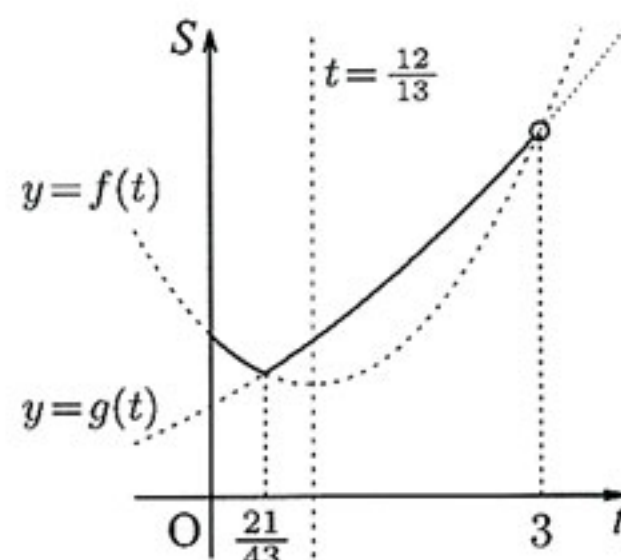


図 2

(1) $1 \leq k \leq n$ に対して

$${}_n C_k = \frac{n!}{(n-k)! \cdot k!} = \frac{n(n-1)(n-2)\cdots(n-k+1)}{k(k-1)(k-2)\cdots 3 \cdot 2 \cdot 1} \quad \dots\dots ①$$

l を $0 \leq l \leq k-1$ の整数として

$$\frac{n-l}{k-l} - \frac{n}{k} = \frac{k(n-l) - n(k-l)}{k(k-l)} = \frac{l(n-k)}{k(k-l)} \geq 0 \quad \dots\dots \text{等号成立は } k=n \text{ のみ}$$

よって、①より

$${}_n C_k = \frac{n}{k} \cdot \frac{n-1}{k-1} \cdot \frac{n-2}{k-2} \cdots \frac{n-k+1}{1} \geq \frac{n}{k} \cdot \frac{n}{k} \cdot \frac{n}{k} \cdots \frac{n}{k} = \left(\frac{n}{k}\right)^k \quad \dots\dots ②$$

次に

$$\begin{aligned} {}_n C_k \div \frac{n^k}{2^{k-1}} &= \frac{n}{k} \cdot \frac{n-1}{k-1} \cdot \frac{n-2}{k-2} \cdots \frac{n-k+1}{1} \div \frac{n^k}{2^{k-1}} \\ &= \left(\frac{n}{k} \cdot \frac{2}{n}\right) \left(\frac{n-1}{k-1} \cdot \frac{2}{n}\right) \left(\frac{n-2}{k-2} \cdot \frac{2}{n}\right) \cdots \left(\frac{n-k+2}{2} \cdot \frac{2}{n}\right) \left(\frac{n-k+1}{1} \cdot \frac{1}{n}\right) \\ &= \left(\frac{n}{n} \cdot \frac{2}{k}\right) \left(\frac{n-1}{n} \cdot \frac{2}{k-1}\right) \left(\frac{n-2}{n} \cdot \frac{2}{k-2}\right) \cdots \left(\frac{n-k+2}{n} \cdot \frac{2}{2}\right) \left(\frac{n-k+1}{n} \cdot \frac{1}{1}\right) \\ &\leq 1 \end{aligned}$$

よって、 ${}_n C_k \leq \frac{n^k}{2^{k-1}} \quad \dots\dots ③$

②, ③より,

$$\left(\frac{n}{k}\right)^k \leq {}_n C_k \leq \frac{n^k}{2^{k-1}} \quad \dots\dots \text{(終わり)}$$

(2) (1)の結果を利用して

$$\sum_{k=1}^n \left(\frac{n}{k}\right)^k \leq \sum_{k=1}^n {}_n C_k < \sum_{k=0}^n {}_n C_k = 2^n$$

よって,

$$\frac{1}{2^n} \sum_{k=1}^n \left(\frac{n}{k}\right)^k < 1 \quad \dots\dots \text{(終わり)}$$

(3) ③の両辺を n^k で割ることにより、 ${}_n C_k \left(\frac{1}{n}\right)^k < \left(\frac{1}{2}\right)^{k-1}$ となるから

$$\begin{aligned} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n &= \sum_{k=0}^n {}_n C_k \left(\frac{1}{n}\right)^k \\ &= 1 + \sum_{k=1}^n {}_n C_k \left(\frac{1}{n}\right)^k \\ &< 1 + \sum_{k=1}^n \left(\frac{1}{2}\right)^{k-1} \\ &= 1 + \frac{1 - \left(\frac{1}{2}\right)^n}{1 - \frac{1}{2}} \\ &< 1 + \frac{1}{\frac{1}{2}} \\ &= 3 \quad \dots\dots \text{(終わり)} \end{aligned}$$

(注)

二項定理

$$(a+b)^n = {}_n C_0 a^n + {}_n C_1 a^{n-1} b^1 + {}_n C_2 a^{n-2} b^2 + \cdots + {}_n C_n b^n$$

において、 $a=b=1$ を代入すると

$${}_n C_0 + {}_n C_1 + {}_n C_2 + \cdots + {}_n C_n = 2^n$$

を得る。

7 $a > 0, k > 0$

(1) 平行移動しても x^2 の係数は変化しないことと、原点を通ることから、 b を定数として

$$C_1 : y = \frac{a}{2}x^2 + bx \text{ とおくことができる.}$$

$$y' = ax + b \text{ より, } x = 0 \text{ における接線の傾きは } b$$

$$y = kx \text{ に接するので, } b = k$$

$$\text{よって, } C_1 : y = \frac{a}{2}x^2 + kx$$

$$\text{同様に, } C_2 : y = -\frac{2}{a}x^2 + kx$$

$$l \text{ の方程式は, } y = -\frac{1}{k}x$$

$$C_1 \text{ と } l \text{ の交点は, } \frac{a}{2}x^2 + kx = -\frac{1}{k}x \iff x\left(\frac{a}{2}x + k + \frac{1}{k}\right) = 0$$

$$\text{よって, } x = 0, -\frac{2}{a}\left(k + \frac{1}{k}\right)$$

$$C_2 \text{ と } l \text{ の交点は, } -\frac{2}{a}x^2 + kx = -\frac{1}{k}x \iff x\left(\frac{2}{a}x - k - \frac{1}{k}\right) = 0$$

$$\text{よって, } x = 0, \frac{a}{2}\left(k + \frac{1}{k}\right)$$

$$\alpha = -\frac{2}{a}\left(k + \frac{1}{k}\right), \beta = \frac{a}{2}\left(k + \frac{1}{k}\right) \text{ とおく.}$$

$$\begin{aligned} S_1 + S_2 &= \int_{\alpha}^0 \left\{ -\frac{1}{k}x - \left(\frac{a}{2}x^2 + kx\right) \right\} dx + \int_0^{\beta} \left\{ \left(-\frac{2}{a}x^2 + kx\right) + \frac{1}{k}x \right\} dx \\ &= -\frac{a}{2} \int_{\alpha}^0 x(x - \alpha) dx - \frac{2}{a} \int_0^{\beta} x(x - \beta) dx \\ &= -\frac{1}{6} \left(-\frac{a}{2}\right) (0 - \alpha)^3 - \frac{1}{6} \left(-\frac{2}{a}\right) (\beta - 0)^3 \\ &= \frac{a}{12} \left(\frac{2}{a}\right)^3 \left(k + \frac{1}{k}\right)^3 + \frac{1}{3a} \left(\frac{a}{2}\right)^3 \left(k + \frac{1}{k}\right)^3 \\ &= \left(k + \frac{1}{k}\right)^3 \left(\frac{2}{3a^2} + \frac{a^2}{24}\right) \end{aligned} \quad \dots\dots \text{(答)}$$

(2) $k = \sqrt{2} - 1$ のとき,

$$k + \frac{1}{k} = (\sqrt{2} - 1) + \frac{1}{\sqrt{2} - 1} = \sqrt{2} - 1 + \sqrt{2} + 1 = 2\sqrt{2}$$

$$S = (2\sqrt{2})^3 \left(\frac{2}{3a^2} + \frac{a^2}{24}\right)$$

相加平均・相乗平均より

$$S \geq (2\sqrt{2})^3 \cdot 2\sqrt{\frac{2}{3a^2} \cdot \frac{a^2}{24}} = 16\sqrt{2} \cdot \frac{2}{6} = \frac{16\sqrt{2}}{3}$$

等号成立は,

$$\frac{2}{3a^2} = \frac{a^2}{24} \iff a^4 = \frac{2}{3} \cdot 24 = 16 \quad \therefore a = 2 \quad \dots\dots \text{(答)}$$

8

1から9のカードの9枚の中から4枚を取り出すとき、その取り出し方は、

$${}_9C_4 = 126 \text{通り}$$

であり、これらは同様に確からしい。

- (1) X が5の倍数となるとき、取り出された4枚の中に5のカードが含まれていればよく、そのような取り出し方は、5以外の8枚のカードから3枚を取り出したときの取り出し方と一致するので、

$${}_8C_3 = 56 \text{通り}$$

である。よって、 X が5の倍数となる確率は、

$$\frac{56}{126} = \frac{4}{9}$$

である。

- (2) X が12の倍数とならない取り出し方を考える。

- (i) 6のカードが含まれるような場合は、残りの3枚が奇数(1, 3, 5, 7, 9)の中から取り出されればよいので、そのような取り出し方は、

$${}_5C_3 = 10 \text{通り}$$

である。

- (ii) 6のカードが含まれないような場合については、

(ア) 3と9のカードがともに含まれる場合は、残りの2枚が2と、3, 9以外の奇数である1, 5, 7の中から取り出されればよいので、

$${}_4C_2 = 6 \text{通り}$$

(イ) 3と9のうちのどちらか片方のみが含まれる場合は、残りの3枚が2と1, 5, 7の中から取り出されればよく、このような取り出し方は、

$$2 \times {}_4C_3 = 8 \text{通り}$$

(ウ) 3と9のカードがともに含まれない場合は、3, 6, 9以外の6枚の中から4枚を取り出せばよいので、

$${}_6C_4 = 15 \text{通り}$$

(ア), (イ), (ウ)より、

$$6 + 8 + 15 = 29 \text{通り}$$

である。

これより、 X が12の倍数とならない取り出し方は、

$$29 + 10 = 39 \text{通り}$$

となるので、 X が12の倍数となる確率は、

$$1 - \frac{39}{126} = \frac{29}{42}$$

である。

- (3) X が平方数となるためには、取り出された4枚が5, 7以外である必要がある。

- (i) 取り出された4枚に3, 6, 9がすべて含まれる場合、 X が平方数となるときは、残りの1枚が2か8であればよいので、そのような取り出し方は、

$$2 \text{通り}$$

- (ii) 取り出された4枚に3, 6, 9のうちの2枚が含まれる場合、 X が平方数となるときは、その2枚が3, 6であり、残りの2枚が

$$(1, 2), (1, 8), (2, 4), (4, 8)$$

となる場合であるので、取り出し方は

$$4 \text{通り}$$

- (iii) 取り出された4枚に3, 6, 9のうちの1枚だけが含まれる場合、 X が平方数となるのは、9が含まれているときに限られ、さらに、残りの3枚が

$$(1, 2, 8), (2, 4, 8)$$

となる場合であるので、取り出し方は

$$2 \text{通り}$$

- (iv) 取り出された4枚に3, 6, 9のいずれも含まれないで、 X が平方数となるのは、

$$(1, 2, 4, 8)$$

が取り出される場合なので、取り出し方は

$$1 \text{通り}$$

以上より、 X が平方数となる取り出し方は、

$$2 + 4 + 2 + 1 = 9 \text{通り}$$

となり、 X が平方数となる確率は、

$$\frac{9}{126} = \frac{1}{14}$$

である。

9

(1) $x > 0$ において条件 $f(x) \geq g(x)$ は

$$\frac{1}{x} \geq e^{-ax+b} \iff xe^{-ax+b} \leq 1$$

となる. ここで $h(x) = xe^{-ax+b}$ とおくと,

$$h'(x) = (1-ax)e^{-ax+b}$$

より, $h(x)$ は右表のように増減し, $x = \frac{1}{a}$ で最大値をとる.

$x > 0$ で常に $h(x) > 0$ となる条件を求めればよいので

$$h\left(\frac{1}{a}\right) = \frac{1}{a}e^{-1+b} \leq 1$$

すなわち $a \geq e^{b-1}$

x	(0)		$\frac{1}{a}$	
$h'(x)$		+	0	-
$h(x)$		↗		↘

..... (答)

(2) $f(x) = \frac{1}{x}$, $g(x) = e^{-ax+b}$ について

$$f'(x) = -\frac{1}{x^2}, \quad g'(x) = -ae^{-ax+b}$$

(i) $y = g(x)$ が点 $(1, 1)$ で $y = f(x)$ に接する条件は

$$g(1) = 1 \text{ かつ } g'(1) = f'(1) \quad \therefore e^{-a+b} = 1 \text{ かつ } -ae^{-a+b} = -1$$

この2式を辺々割ることにより

$$-a = -1 \text{ かつ } e^{-a+b} = 1, \quad \text{よって, } (a, e^b) = (1, e)$$

(ii) $y = g(x)$ が点 $(2, \frac{1}{2})$ で $y = f(x)$ に接する条件は

$$g(2) = \frac{1}{2} \text{ かつ } g'(2) = f'(2) \quad \therefore e^{-2a+b} = \frac{1}{2} \text{ かつ } -ae^{-2a+b} = -\frac{1}{4}$$

この2式を辺々割ることにより

$$-a = -\frac{1}{2} \text{ かつ } e^{-2a+b} = \frac{1}{2}, \quad \text{よって, } (a, e^b) = \left(\frac{1}{2}, \frac{e}{2}\right)$$

$g(x) = e^b \cdot e^{-ax}$ だから, (i), (ii) より,

$$g_1(x) = e^{-x+1}, \quad g_2(x) = \frac{1}{2}e^{-\frac{x}{2}+1}$$

となる. $y = g_1(x)$ と $y = g_2(x)$ とを連立すると

$$e^{-x+1} = \frac{1}{2}e^{-\frac{x}{2}+1} \iff 2 = e^{\frac{x}{2}} \iff x = 2 \log 2$$

このとき $g_2(x) = \frac{1}{2} \cdot 2^{-1} \cdot e = \frac{e}{4}$ だから, 交点は

$$\left(2 \log 2, \frac{e}{4}\right)$$

..... (答)

(3) $g_1(x)$, $g_2(x)$ とともに a と b は (1) の条件を満たすので, $x > 0$ において常に

$$f(x) \geq g_1(x), \quad f(x) \geq g_2(x)$$

が成り立つ. また

$$g_1(x) \geq g_2(x) \iff 2 \geq e^{\frac{x}{2}} \iff x \leq 2 \log 2$$

であるので, 3つのグラフは右図のようになる.

ここで $\alpha = 2 \log 2$ とおくと $e^{\frac{\alpha}{2}} = 2$, $e^\alpha = 4$ で,

$$S_1 = \int_1^2 f(x) dx = \left[\log x \right]_1^2 = \log 2$$

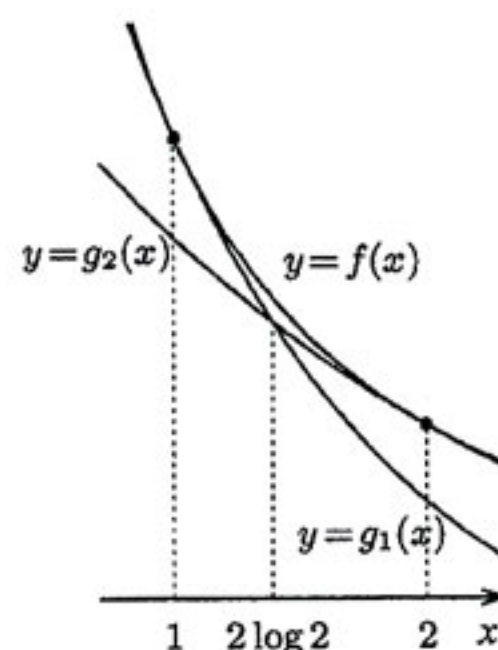
$$S_2 = \int_1^\alpha g_1(x) dx = \left[-e^{-x+1} \right]_1^\alpha = -e^{1-\alpha} + 1 = 1 - \frac{e}{4}$$

$$S_3 = \int_\alpha^2 g_2(x) dx = \left[-e^{-\frac{x}{2}+1} \right]_\alpha^2 = -1 + e^{-\frac{\alpha}{2}+1} = \frac{e}{2} - 1$$

となるので, 3つの曲線で囲まれる図形の面積は

$$S_1 - (S_2 + S_3) = \log 2 - \frac{e}{4}$$

..... (答)



(1) 与えられた定積分において, $x = \tan^3 \theta$ と置換すると

$$dx = 3 \tan^2 \theta \cdot \frac{1}{\cos^2 \theta} d\theta = 3 \tan^2 \theta (1 + \tan^2 \theta) d\theta$$

$$\begin{array}{c|c} x & 1 \rightarrow 3\sqrt{3} \\ \theta & \frac{\pi}{4} \rightarrow \frac{\pi}{3} \end{array}$$

となるので,

$$\begin{aligned} \int_1^{3\sqrt{3}} \left(\frac{1}{\sqrt{x^2}} - \frac{1}{1 + \sqrt{x^2}} \right) dx &= \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{3}} \left(\frac{1}{\tan^2 \theta} - \frac{1}{1 + \tan^2 \theta} \right) \cdot 3 \tan^2 \theta (1 + \tan^2 \theta) d\theta \\ &= 3 \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{3}} \{ (1 + \tan^2 \theta) - \tan^2 \theta \} d\theta \\ &= 3 \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{3}} d\theta = 3 \left[\theta \right]_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{3}} = 3 \left(\frac{\pi}{3} - \frac{\pi}{4} \right) = \frac{\pi}{4} \end{aligned}$$

..... (答)

(2) $t > 1$ に対して $t = \tan^3 p$ ($\frac{\pi}{4} < p < \frac{\pi}{2}$) とおく.

$g(t)$ として定められた定積分において $x = \tan \theta$ とおくと, (1) と同様にして

$$\begin{aligned} g(t) &= \int_1^t \frac{1}{1 + \sqrt{x^2}} dx \\ &= \int_{\frac{\pi}{4}}^p \frac{1}{1 + \tan^2 \theta} \cdot 3 \tan^2 \theta (1 + \tan^2 \theta) d\theta \\ &= 3 \int_{\frac{\pi}{4}}^p \tan^2 \theta d\theta = 3 \int_{\frac{\pi}{4}}^p \left(\frac{1}{\cos^2 \theta} - 1 \right) d\theta = 3 \left[\tan \theta - \theta \right]_{\frac{\pi}{4}}^p \\ &= 3 \left(\tan p - \tan \frac{\pi}{4} - p + \frac{\pi}{4} \right) \\ &= 3 \left(t^{\frac{1}{3}} - 1 - p + \frac{\pi}{4} \right) \end{aligned}$$

となる. よって

$$g(t) - at^b = 3t^{\frac{1}{3}} - at^b - 3 \left(p + 1 - \frac{\pi}{4} \right)$$

となるが, $t \rightarrow \infty$ のとき $p \rightarrow \frac{\pi}{2}$ であることより, $g(t) - at^b$ が収束するための条件は

「 $h(t) = 3t^{\frac{1}{3}} - at^b$ が収束する」

ことである. ここで次のように分類される.

(i) $0 < b < \frac{1}{3}$ のとき, $h(t) = t^{\frac{1}{3}} (3 - at^{b-\frac{1}{3}})$ として,

$t \rightarrow \infty$ で $t^{\frac{1}{3}} \rightarrow \infty$, $3 - at^{b-\frac{1}{3}} \rightarrow 3$ より, $h(t)$ は発散する.

(ii) $b > \frac{1}{3}$ のとき, $h(t) = t^b (3t^{\frac{1}{3}-b} - a)$ として,

$t \rightarrow \infty$ で $t^b \rightarrow \infty$, $3t^{\frac{1}{3}-b} - a \rightarrow -a$ より, $h(t)$ は発散する.

(iii) $b = \frac{1}{3}$ のとき, $h(t) = t^{\frac{1}{3}} (3 - a)$ となり,

$t \rightarrow \infty$ で $t^{\frac{1}{3}} \rightarrow \infty$ より, $3 - a \neq 0$ ならば $h(t)$ は発散する.

(i), (ii), (iii) より, $g(t) - at^b$ が収束する必要十分条件は

$$b = \frac{1}{3} \text{ かつ } 3 - a = 0$$

であるから, 求める a, b の値は

$$a = 3, \quad b = \frac{1}{3}$$

..... (答)

(1) 5以上の素数は2の倍数でも3の倍数でもない.

一方、5以上のすべての自然数 N は、自然数 n を用いて、

$$6n - 1, 6n, 6n + 1, 6n + 2, 6n + 3, 6n + 4$$

のいずれかの形で表すことができる.

このうち、 $6n$, $6n + 2$, $6n + 4$ は2の倍数であり、 $6n + 3$ は3の倍数であるので、5以上の素数は、

$$6n - 1 \text{ または } 6n + 1$$

と表される必要がある.

(2) すべての自然数 N において、 $6N - 1$ は5以上の自然数となる.

また、 $6N - 1$ は2でも3でも割り切れないので、 $6N - 1$ を素因数分解したとき、5以上の素因数が含まれる.

$6N - 1$ を素因数分解したときの素数が、すべて $6k + 1$ の形で表されるとき、すなわち、

$$6N - 1 = (6k_1 + 1)(6k_2 + 1) \cdots (6k_m + 1) \quad (m \text{ は自然数, } i = 1, 2, \dots, m \text{ としたとき } 6k_i + 1 \text{ は素数})$$

と表されるとすると、この右辺は

$$6 \times (\text{整数}) + 1$$

となり、右辺が6で割ると5余る数であることと矛盾する.

したがって、 $6N - 1$ は $6n - 1$ で表される素数を約数としてもつ.

(3) $6n - 1$ で表される素数が有限個であるとする.

このとき、 $6n - 1$ の形となる素数の個数を l とし、これらを小さいものから並べたものを、

$$6k_1 - 1, 6k_2 - 1, \dots, 6k_l - 1$$

とする. $6k_l - 1$ は $6n - 1$ で表される素数のうちで最大の素数である.

$$T = 6(6k_1 - 1)(6k_2 - 1) \cdots (6k_l - 1) - 1$$

とおくと、

$$T \text{ は } 6k_1 - 1, 6k_2 - 1, \dots, 6k_l - 1 \text{ のどの素数でも割り切れない } \cdots (*)$$

一方、 $T > 6k_l - 1$ で、 T は $6N - 1$ の形の自然数であるから素数ではない. よって、(2) より T は $6n - 1$ の形の素数因数をもつが、これは (*) に反する.

以上より、 $6n - 1$ の形で表される素数は無限に存在する.

- (1) 命題「 $f(x) \geq 0 \implies g(x) \geq 0$ 」がすべての実数 x について成り立つ条件は、不等式 $f(x) \geq 0$ の解 $x \geq 2 - a^2$ …… ①

が不等式 $g(x) \geq 0$ の解に含まれることである。

3次関数 $y = g(x) = x(x - a)(x - a - 2)$ のグラフを考慮すると、 $g(x) \geq 0$ の解は次のようになる。

- (i) $a < -2$ のとき

$$a \leq x \leq a + 2, 0 \leq x$$

①が含まれるための条件は

$$0 \leq 2 - a^2 \iff -\sqrt{2} \leq a \leq \sqrt{2}$$

であるが、これは $a < -2$ に矛盾する。

- (ii) $a = -2$ のとき

$$x \geq -2$$

このとき ①は $x \geq -2$ となるので、含まれる。

- (iii) $a > -2$ のとき

- (ア) $-2 < a < 0$ のとき

$$a \leq x \leq 0, a + 2 \leq x$$

- (イ) $a = 0$ のとき

$$a = 0, 2 \leq x$$

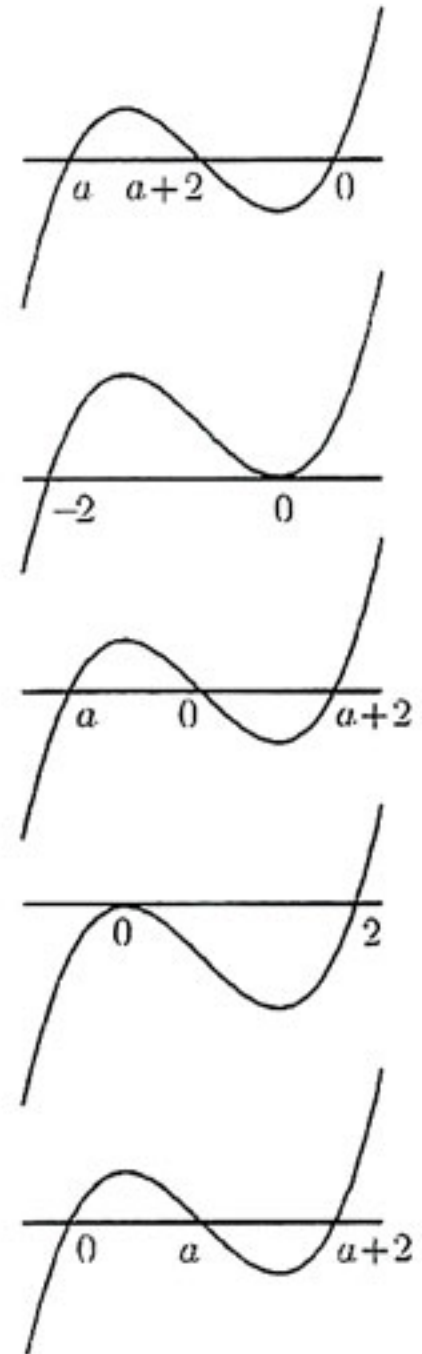
- (ウ) $a > 0$ のとき

$$0 \leq x \leq a, a + 2 \leq x$$

となるが、これらいずれの場合も ①が含まれるための条件は

$$a + 2 \leq 2 - a^2 \iff a(a + 1) \leq 0 \iff -1 \leq a \leq 0$$

であり、これは $a > -2$ を満たす。



以上、(i), (ii), (iii) より

$$a = -2 \quad \text{または} \quad -1 \leq a \leq 0$$

…… (答)

- (2) 命題「 $x \geq 0 \implies f(x) \geq 0$ または $g(x) \geq 0$ 」がすべての実数 x について成り立つ条件は、 $x \geq 0$ の範囲のすべての x の値が不等式「 $f(x) \geq 0$ または $g(x) \geq 0$ 」の解に含まれることである。

- (i) $a \leq -2$ のとき、 $x \geq 0$ は $f(x) \geq 0$ の解に含まれるので、命題は成り立つ。

- (ii) $-2 < a \leq 0$ のとき、 $x \geq 0$ は $f(x) \geq 0$ の解に含まれない。よって「 $f(x) \geq 0$ または $g(x) \geq 0$ 」の解に含まれるための条件は

$$2 - a^2 \leq 0 \iff a \leq -\sqrt{2}, \sqrt{2} \leq a$$

であるが、 $-2 < a \leq 0$ より

$$-2 < a \leq -\sqrt{2}$$

- (iii) $a > 0$ のとき、 $x \geq 0$ は $f(x) \geq 0$ の解に含まれない。よって「 $f(x) \geq 0$ または $g(x) \geq 0$ 」の解に含まれるための条件は

$$2 - a^2 \leq a \iff (a + 2)(a - 1) \geq 0 \iff a \leq -2, 1 \leq a$$

であるが、 $a > 0$ より

$$1 \leq a$$

以上、(i), (ii), (iii) より

$$a \leq -\sqrt{2} \quad \text{または} \quad 1 \leq a$$

…… (答)